



ガバナー四方山話

第7回 フラメンコと闘牛

スペインには永い歴史の中で育まれた文化があります。その中でも特徴的なのがフラメンコと闘牛です。特にフラメンコは、夕食の終わる頃の12時近くに開演するのですが、真打が出てくるのは夜中の1時をかなり回った頃です。ほとんどの日本人観光客はこれを待てずに帰ってしまいます。しかし、真打のフラメンコは凄いです。ギターを弾き歌う男性と踊る女性の2人だけで醸し出す雰囲気は語り様がありません。

手に持ったカスタネットが時折雷のように鳴ったかと思うと、ある時は逃げた男を追い詰めるかのようにカチ、カチ、カチと背中に冷たいものが走るような気にさせられます。そのようなフラメンコのほとんどが女性の恨み節の真骨頂と言えるものでした。まあ、大勢で舞台の上で並んで踊るフラメンコはお祭り騒ぎでそれはそれで楽しいものですが。

闘牛もスペインならではのもので、毎年5月から10月がシーズンで、毎週日曜日に開催されます。闘牛場の半分が太陽の影に隠れるとスタートします。日陰の席が高く日なたは安いのです。1日に6頭の牛が3人の闘牛士との戦いに出されます。

この闘牛に出てくる牛は、田舎で人手をかけずに牧場でんびり放牧されていて、闘牛のある日にいきなり都会のそれも闘牛場に引き出されるので、興奮状態そのものです。牛という生き物は、元来おとなしい動物ですが、興奮すると攻撃的になります。

このような牛を相手に最初は馬に乗って槍を持った槍士(ピカドール)が、牛の背中をチクチク痛めます。これはその牛を傷つけてより興奮させるためだと言われています。この時、牛に戦う意欲が無いと判断されると、その牛は退場させられて、別の牛が出されます。

その次に銜を両手に持った闘牛士(バンデリジェーロ)が向かってくる牛の背中に銜を打ちますが、これもとても見ごたえのあるもので、牛の前で舞うように銜を打つ闘牛士も居ます。合計3回計6本の銜が打たれます。

最後に例のムレータという布を持ち、その布で牛を操り、最期に剣で牛をしとめるマタドールという闘牛士が出て来ます。この頃には牛はかなり疲労していますが、それを上手に走らせ最後に正面から背中に剣を刺し心臓一突きすると、牛はその場でぴたりと止まり、闘牛士がそっと頭に手を置くとその場で崩れるという形になると、闘牛場が割れんばかりの拍手喝さいとなります。

しかし、多くは一度では急所に刺すことが出来ず、幾度もやり直すこともありますし、最期は短剣を使ってとどめを刺すようなこともあります。こうなるとブーイングです。

闘牛士は、その出来が良いと、闘牛場の審判団から、戦った牛の耳を授与されますが、これまで耳をいくつ集めたかがその闘牛士の勲章となります。最高の出来栄の時は、尻尾をもらうことがあります。滅多にありません。

とどめを刺された牛は、翌日、闘牛の肉として近くの市場で売りに出されます。闘牛場の近くのレストランで闘牛に出た牛のお肉を売り物にしているところもあります。まあ、大して美味しいお肉では無さそうでしたが。

人間のあくなき追及の姿が垣間見れたと感じています。